

KIF NEWS

2009.1

No. 11

かながわ国際交流財団
Kanagawa International Foundation

ケイアイエフ ニュース



特集

食卓とつながる世界

低い食料自給率、食の安全、穀物や燃料の価格高騰、様々な食品の値上げ、グローバル化の影響を受ける生産者の苦悩など、私たちの命に直結する「食」に関わる様々な問題が話題になる昨今、『KIF NEWS』では、ここ神奈川での取り組みをととして、私たちの「食」のあり方について考えます。有機農業に取り組む相原成行さんにインタビューしてわかったことは、畑から生み出されるのは、野菜だけではないということ。いったい畑は何を生み出すことができるのでしょうか。その答えが、私たちの命を守り、持続可能な世界に近づくための道標になるように思います。

あわせて世界の多様な食卓の様子を撮影した写真をととして、食文化への理解を深め、食のグローバル化が生み出す問題について考える企画展「地球の食卓」のお知らせも掲載しています。ぜひ御来場ください。

企画展「地球の食卓」と関連イベントのお知らせ 4

■知をめぐる対話シリーズ (9)

山崎 貴美子さん(神奈川県立保健福祉大学学長) 5~7

■ KIF Report かながわ国際交流財団実施事業

地球市民ひろば(フォーラム)、リーダーシップ養成講座、インカレ国際セミナー、湘南国際村フォーラム 8

■ Event Schedule これから開催される催し

地域の国際化を考えるセミナー、多文化子ども支援ネットワークフォーラム、三浦半島スタディツアー、湘南国際村アカデミア 9

■事業報告と報告書作成のお知らせ

セミナー「戦争は避けられないのか?~イラク戦争に学ぶ~」報告、関連報告書の紹介 10

かながわのキーパーソン 千葉 保さん(『コンビニ弁当 16万キロの旅』監修など) 11

MIXED RECOMMEND 「食べるために生きる」か「生きるために食べる」か 11

「21世紀かながわ円卓会議」のお知らせ 12

特

集

食卓とつながる世界

インタビュー：「土を受け継ぐ、思いを受け継ぐ」

相原 成行さん（食農研 相原農場）

プロフィール

1967年生まれ。宇都宮大学農学部農芸化学科卒業。

1991年に両親の跡を継ぎ就農。

<http://www.rangers.bz/~aihara-farm/>



藤 沢市の西北部にある宮原耕地は農業が盛んな地域だ。その地で農家の5代目として生を受け、有機農業を営む相原さんにお話を伺った。「有機農業は生き方」と語る彼の農との関わり方とはどのようなものだろうか。

安全な食品を消費者へ届ける「使命」

相原農場で有機農業を始めたのは1980年。「きっかけは、母の病気でした。肝機能障害を起こして毎日通院するうちに、その原因を探し求める中で行き着いたのが体質改善でした」その後、母親は体質改善のため食生活研究会（※）の勉強会等に参加しながら、安心・安全な食べ物を求めている消費者がいかに多いかということに気づいたという。そして、そのような消費者に向けて野菜を作ることが生産者としての「使命」だと感じ、家族と話し合い、無農薬や化学肥料を使用しない有機農業に切り替えることを決意した。

両親の跡を継ぎ、相原さん自身が就農したのは、大学を卒業してすぐの1991年だ。「就農を決めた理由の一つは、祖父や父と食生活研究会の消費者グループとの関わり合いが新鮮に思えたことですね。どんどん入ってくる消費者のみなさんと一緒に作業したり、楽しそうに話し合ったりしている親の姿を見て、そういう関係っていいなって思いました」

「生き方」を変える

通常、有機農業に転換し土が良好な状態に回復するまでに3～5年かかるが、もともとあまり薬品を使わず土を酷使していなかったという相原農場では土地の回復も早く、91年に相原さんが就農するころには、とてもいい状態だったという。

だが、すべて整った上で有機農業に入ったとはいえ、当時はバブルの絶頂期。「（家族の活動を通じて）感覚的には、“人間の交わりの大切さ”や“自分たちが

やっていることのすばらしさ”がわかっていったのに、“大量生産・大量消費・大量廃棄”の流れに乗った大学生活を送ってきたので、相反する有機農業の世界に入ってから数年間はギャップを感じていました」とのこと。そんな気持ちのズレもあり、当時は同世代が参加する有機農業研究会に出ても、恥ずかしくて話に加われなかったという。「最初の頃は心苦しかった。ここに居ること自体が…。自分を支えている考え方が、有機農業とは違うところに根っこを張っていたので。でも、それが自分でもわかったんだよね。消費者や他の有機農家と出会って、どんどん変われたんだよね」有機農業の実践が、次第に彼の「生き方・考え方」を変えていったのだ。

有機農業の基本は土づくり

自然農法による土づくりの出発点は自家製の堆肥や肥料にある。堆肥は落ち葉や植木の剪定枝に米糠を混ぜて発酵させ、肥料

には家畜の糞尿を混ぜる。その貴重な材料となっているのは、地域の植木屋や知り合いのお寺の山からいただく剪定枝や落ち葉だ。都市部ではゴミとして処分される資源を地域と連携して、土づくりに有効利用している。また落ち葉は「踏み込み温床」を利用して、苗を育てるための大切な床土となる。「踏み込み温床」とは、落ち葉に米糠や肥料を混ぜ、人の足で踏み固め腐葉土を作る昔ながらの農法である。土が発酵する時に発生する35度近くの熱を利用して苗を寒さから守り、冬の間も種から苗を栽培することができる。手間がかかるために、最近の農家では珍しくなったこうした土づくりの方法は、まさに循環する持続可能な農のスタイルである。（農家によっては、暖めるために電線を巡らせたり、他の暖房を使ったりすることもある。）

相原農場には約220アールの畑が広がり、今では年間を通じて約70品目を作っている。かぶ、春菊、ブロッコリー、キャベツなど、旬の野菜が太陽の光を浴びる畑を眺めるうちに目に止まったのは、立派に育った小松菜。「これはわざと残してます。大きくなった小松菜はこれから霜が降りる

と甘さが増しておいしくなる。まったく別の野菜になるんです。だけど、これはこういう（消費者との顔が見える）関係でないと出せない」生産者の顔が見えないスーパーの店頭などでは“規格外”の野菜は、消費者の理解が得られにくいのだ。こうして旬に収穫された野菜は提携団体や、直販している個人宅に届けられる。

出会いの場「農・未来塾」

相原さんは「農・未来塾」という一泊二日のイベントを自宅で開催している。年に一度、すでに9回目を迎えた。様々な人に農業の話をしてもらい、若い人に伝えていくのがねらいだ。その根底には、相原さんが一番大事にしたいと語る「何で有機農業か？」ということへの思いがある。

「農薬や化学肥料を使った土は、酷使されていて続いていけないと思うのです。農業をずっと続けていくには、土を受け継いでいくこと、そのためには思いを受け継いでいかなければいけない。いろんな人にその思いを伝えていかなければなりません。農業に関心を持ってもらい、馴染んでもらう。そんな気軽な場所を提供したかったんです」

じっくり話を聞くことで自分の考えをふくらませてほしい、農業への入口、人が動き出すきっかけとなる役割を果たせたいという相原さん。実際に、「農・未来塾」を縁に、就農する人も多いという。

畑が生み出すのは旬の野菜だけではない

相原さんのお話でもっとも印象に残ったのは、農地を持つ者としての役目について。「もちろん、畑が安全な食料生産の場であることは外すことのできない一番の目的。ただ、それだけではないと思っています。畑はいろいろな人と関われる場所。人と人をつなげる場所としての農地の使い方もあります。自分にはそれを伝えていく責任があると思います」と相原さんは語ってくれた。単に「生産－消費」の関係だけではない。農を通じて人が育つ社会をつくる、農業の本来の価値がそこにあるように思えた。

※神奈川県藤沢市に本部を置く消費者グループ



ほんわり温かい「踏み込み温床」のハウス



霜が降りるのを待つ小松菜



母親作の看板。人をつなぐ「農・縁」との思いを込めて

コラム コップ一杯のミルク

毎朝、コップ一杯のミルクを飲む。この紙パックに詰められたミルクが、目の前のコップに注がれるまでに、どんな道のりがあるのだろう。松本で酪農を営む若い夫婦にお世話になった。

早朝5時に起き、6時前には牛舎を掃除して、餌をやり、牛たちの体を洗い、ミルクを搾り、また牛舎をきれいに掃除する。一仕事終えて時計を見上げると午前9時。夕方4時頃からまた同じことを繰り返す。それを毎日繰り返す。日中は牧草の畑のことや色々な別の仕事がある。休んでいる暇などなかなかない。

「そっか。牛たちのいのちと、酪農家の人たちの毎日があるから、コップ一杯のミルクがある」当たり前のことだけど考えてみなかった、大切な何かを知った気がした。



映画紹介『いのちの食べかた』

毎日食べる肉や野菜は、どのようなところで、どのように育てられ、どうやってパックに詰められ、私たちの食卓に届くのか？効率を追求した生産の現場を映像のみによって描く食のドキュメンタリー。この映画を観て何を思うかは、私たち次第です。

原題：OUR DAILY BREAD
2005年/オーストラリア・ドイツ/92分
監督：ニコラウス・ゲイハルター
配給：エスパース・サロウ
提供：新日本映画社

この映画の上映会があります。詳細は次ページを御覧ください。



企画展の御案内

財団が指定管理者として運営するあーすぶらぎでは、「地球規模の課題」や「こどもの感性の育成」などを目的に、毎年3回の企画展を実施しています。2月7日から始まる今年度第3回企画展では、「食」をテーマに、写真展を開催します。



地球の食卓写真展

～世界24か国の家族のごはん～

「食」は、人が生きていく上で欠くことのできない重要な営みの一つであり、世界中のあらゆる地域で、それぞれに固有の食文化が息づいています。

今回の写真展は、話題の写真集・地球家族シリーズ『地球の食卓』より、ピーター・メンツェルとフェイス・ダルージオのふたりが取材した、世界各地のごくありふれた場所の、ごくありふれた家族の、ごくありふれた食卓の風景から約90点の写真を紹介します。

それぞれの家族の食卓には、世界の多様な食の文化が溢れていると同時に、目に見える食品市場のグローバル化や、ライフスタイルの変化、豊かな国と貧しい国の食料の格差など、世界で起きている様々な「食」の現実が見え隠れしています。

何よりも身近なことなのに、当たり前になり、通り過ぎてしまいがちな「食」の問題。期間中は、様々な切り口から「世界の食」や私たちの「身近な食」をテーマにイベントも行います。



エジプト／アフマドさん一家



中国／ツイさん一家



チャド／アブバカルさん一家

©ユニフォトプレス

『地球の食卓 世界24か国の家族のごはん』

《著 者》ピーター・メンツェル＋

フェイス・ダルージオ

《発 行》TOTO 出版／2006年



期 間：2009年2月7日(土)～3月29日(日) 10：00～18：00 ※月曜休館

場 所：あーすぶらぎ3階・企画展示室（入場無料）

主 催：あーすぶらぎ、写真提供／ユニフォトプレス、協力／TOTO出版

問 合 せ：学習サービス課 TEL：045-896-2899

■「事前申込制」のイベントは、①参加希望イベント名②開催日③名前④電話番号を明記し、下記まで電話、ファックス、メールでお申し込みください。メールの場合は件名にイベント名と開催日を明記してください。（例「2/28 講演会」）。受付は先着順で、定員になり次第、締切といたします。

■問合せ・申込み（料理講座を除く）：学習サービス課（祝日除く月曜休み） TEL：045-896-2899 FAX：045-896-2299 E-mail：gakushu@k-i-a.or.jp

①WFP 国連世界食糧計画パネル展示

世界で飢えや栄養不良に苦しむ人々は約8億5000万人以上と言われています。そのうち3億人が15歳未満の子ども達です。この深刻なテーマを、私たち一人ひとりが考え、行動していくことが、いま求められています。

協 力：認定NPO 法人 国連WFP協会、WFP応援団

日 時：2月7日(土)～3月29日(日)

9：00～17：00

※月曜休館 3/17・3/18臨時休館

場 所：あーすぶらぎ5階・常設展示室

入場料：常設展示室観覧料

（大人500円/65歳以上・高校・大学生
300円・小中学生100円・幼児・障がい者
及びその介助者2名無料）

②『食の未来』③『いのちの食べかた』

②『食の未来』上映会

ひそかに食品売り場を占領してきた遺伝子組み換え食品の背後にある真実にメスを入れた作品。

日 時：2月15日(日) 14：00～15：30

場 所：あーすぶらぎ5階・映像ホール

参加費：無料

定 員：130名/当日・先着順

③『いのちの食べかた』上映会

※作品紹介は3ページを参照。

日 時：3月21日(土) 14：00～16：00

場 所：あーすぶらぎ2階・プラザホール

参加費：無料

定 員：300名/事前申込制

④「世界がもし100人の村だったら」

私たちはいま、世界の何に目を向けるべきなのでしょう。世界が直面している現状を分かりやすく紹介し、大反響を呼んだ『世界がもし100人の村だったら』の著者である池田香代子さんを講師にお招きし、「100人村シリーズ」の出版に込めた彼女の想いなどをお話していただきます。

日 時：2月28日(土) 14：00～16：00

場 所：あーすぶらぎ2階・プラザホール

対 象：一般

参加費：無料

定 員：200名/事前申込制

⑤フランス料理講座

⑥ペルー料理講座

「地球の食卓」を味わってみませんか？

⑤フランス料理講座

日 時：2月28日(土) 10：00～14：00

講 師：ニコラ・モローさん

フランス・リヨン出身。(有)リトルヨーロッパ
等で料理及び語学講師を務める。

⑥ペルー料理講座

日 時：3月7日(土) 10：00～14：00

講 師：アルバロ・デル・カスティージョさん

ペルー・リマ出身。ペルーや南米の食文化
や歴史を研究中。

場 所：あーすぶらぎ1階・料理室

受講料：3,500円（材料費込み）

持ち物：エプロン、筆記用具

*メニュー等はお問合せください。

問合せ・申込み 国際協力課（担当：とみもと）

TEL：045-896-2964

⑦「私の食が世界・地球をつくる ーフードマイレージから考える」

私たちが毎日口にしていく食糧は、世界とどのようにつながっているのでしょうか。小学校や中学校での総合的な学習の授業や、市民講座など幅広く活躍している近藤恵津子さん（NPO 法人CS・まちデザイン理事長）をお招きし、「フードマイレージ」を切り口に、ワークショップを通じて皆さんとともに考えます。

日 時：3月1日(日) 13：30～16：00

場 所：あーすぶらぎ1階

ワークショップルーム

対 象：一般（高校生以上）

参加費：無料/事前申込制

定 員：30名/事前申込制

⑧エスニック料理と暮らしのセミナー ⑨おしゃべりワールドスペシャル

⑧エスニック料理と暮らしのセミナー

ベトナム出身のゲストとベトナム家庭料理を作り、文化や暮らしのお話を聞きます。

日 時：3月8日(日) 10：00～14：00

場 所：あーすぶらぎ1階・料理室ほか

対 象：小中学生（親子参加歓迎）

参加費：無料 ※要材料費 800円

定 員：25名/事前申込み制

⑨おしゃべりワールド・スペシャル

外国出身のゲストのお話やクイズを通じて各国の食の文化を体験します。

日 時：3月15日(日) 14：30～16：00

場 所：あーすぶらぎ5階・常設展示室

参加費：常設展示室観覧料

無理なく、違和もなく

山崎 貴美子さん（神奈川県立保健福祉大学 学長）

かながわ国際交流財団は湘南国際村に関連する研究機関と協力し、「持続可能な社会へ向けて」を主なテーマに湘南国際村フォーラム^{※1}を開催しています。昨年度「生命をめぐる対話」と今年度「“科学”の営み・“こころ”の営み」の2ヶ年にわたり、モデレーターを務められている山崎さんに、福祉の研究を志すに至った背景などをお聞きしました。



異文化で培った、幼いころの経験

一山崎学長が福祉に対して関心をもつようになったのは、どのような背景があったのでしょうか。

私はインドネシアで生まれ、幼少期は父の仕事で地球のあちこちで暮らしました。南米のチリやペルーで暮らしたときには、いろいろな国の言葉で話をする友人が沢山いました。外国と日本の行き来をしていたので、肌の色や言葉が違うことに抵抗がないのです。自分でも知らないうちに人種の壁や言葉の壁を取り払って生きてきたので、出来れば日本の中だけではなく、いろいろな人と友達にな

りたいと思っていました。好奇心が普通の人より強いのでしょうか。

それから、子どものころ戦争を経験したでしょ。敵国に暮らして、戦後その国に戻ると、大変なことになっている。特に子どもや高齢者が辛い目に合うので、他の人以上に平和の大切さを感じていたのかもしれない。

一学生時代は日本で過ごされたようですが、社会福祉の分野へ進まれたのはどのようなきっかけからでしたか。

中学・高校時代は横須賀でカソリックの学校に行きました。日本人ではないシスターが

いたり、アメリカ人の兵隊さんが学校に来たり、戦後の独特の時代を過ごしました。

横須賀には麻薬を売買する場所があり、その犠牲になっている子どももいましたし、また子どもを育てられる状況ではない所で生きるお母さんたちにも会いました。そういう、切実なニーズというのが横須賀にはたくさんあったのです。まだ学校を出てほやほやの時に色々な人と付き合っ、またスーパーバイザーにも恵まれて、いろいろなことを学びました。

社会福祉の仕事をするようになったのも、自然に、高齢者やハンディキャップのある子どもと歩きたい、と思ったのですね。無理なく、違和感もなく、しかもと

でも面白いと思って。仕事が楽しくて夜10時11時まで働いていましたが、それが苦痛だとか辛いとは思いませんでした。

父の想い

父は一時期、敵国で収容所に抑留されていました。敵も味方もない中で、神父さんに出会ったり、ドイツ語やフランス語に触れたりといった経験をしたようです。この極限状態での原体験から、もしも日本に戻ることができたなら、次の世代には、戦争や国家、政治とは関わりのない「永遠の力」というか、「人や時代を超えた価値」があるということを伝えたい、と思っていたようです。父はクリスチャンでもなく泥臭い人でしたが、その父の想いがあって、私はカソリックの学校に通うことになったのです。人間を超える存在があること、人間の存在がどんなものなのかを教えたかったのだと思います。

でも、そんな父の想いに本当に気がついたのは、体を壊して、仕事を辞めようと思うようなことがあってからでした。このときの経験をきっかけに、人間はなぜ存在し、生きるのか、人間の中の原罪とは何か、その罪を背負って生きることの意味は何かを学び、信仰をもつようになりました。自分で自分を許すのではなく、大きな力によって生かされていることに深く想いを至し、真の意味で人と深く共感をもって人を受け止めることができることを学びました。

イギリスで体験した多様な福祉サービスのかたち

ー1970年代、イギリスにご留学なさったとのことですが、当時は、女性が研究活動を続け、留学するのも珍しかったのではないのでしょうか。

第二の故郷と呼んでもふさわしい場所です。たまたま夫が単身赴任でイギリスに駐在していたことやブリティッシュ・カウンセルの援助が得られたので留学する機会が与えられました。当時イギリスが社会福祉の大転換をした時でした。国中心の政策から、コミュニティーをベースとした地方自治体の政策に転換しており、その混乱と組織の変更を肌で感じていらっしゃい、と恩師に言われたのです。地方自治体でのインターンシップと大学院に半分ずつ通いました。

イギリスのいろいろな暮らし方に関心があったので都市部ではなく、田舎でくらしました。小さな村で、外国人はほとんどいない所でしたが、着いてみると、小さなカードがポストに入っていました。「東洋の小さな国からいらして、あなたがここで勉強すると聞いています。あなたが一番先にしなければならぬのは、子どもを保育してくれる場所を見つけることだと思います。私がリストを作っているの、子どもの保育所を明日から一緒に回りましょう」というメッセージでした。そのミセス・ロークリフ一家と私たちはその後親友になる

のですが、イギリス流の、胸を張ってこつこつと歩くおばさんがやってきて、抱きかかえるようにして、「あなたこんな小さい子どもを抱えて、こんな田舎まで来て」と言ってくれて。

その後何か所も保育施設を見て歩きましたが、娘が通ったのは、6～7人の子どもを預かる家庭保育所のような所でした。私たちが行ったとき、その女性が寒いのに膝をついて娘の帽子とコートを取ってくれて、娘を抱きしめて、「あなたはなんていう名前なの」と聞くのです。娘と同じ目の高さになって娘を抱きしめる姿にすごく胸を打たれました。「ああ、イギリス人って、私が考えていたのとは違うんだ」と思いました。

出産のシステムも全く違いました。あるとき、配達してもらっていたミルクが、1本しか頼んでいないのに2本届く。「何かの間違いだ」と紙に書いて貼っていても、2本配達され続ける。とうとう早朝、配達人を待っていたら、「あなたの家にコウノトリが来るんでしょ」と言うのです。どうしてこの人がそんなこと知っているのだろう、と驚いていると、配達人が「ここではね、赤ちゃんが生まれる家にはミルクは無料で配達するんです」と教えてくれました。イギリスの福祉制度は登録制で、いったん登録するとシステムがすべて動き出します。それが1970年代でした。



ヒューマンサービスという 新しい教育へ

—異なる社会システムに触れられたご経験が、この大学のヒューマンサービスという独自プログラムの基礎にあるのですね。

第1回湘南国際村フォーラム※¹では、「人をどう捉えるのか」について、異なる学問領域から議論し合いました。今、世界は専門分化し、人までも細切れにされていく時代ですが、人は本来ホリスティックなものです。この大学を設立するにあたって、阿部志郎先生※²とひたすら話し合ったのは、「人を全体として捉える」ことでした。「人は一人ひとり違う」ことを大切に、かけがえのない人格として捉えることを主軸に置くと、「ヒューマンサービス」という考え方が出てきます。つまり、人にはそれぞれ「その人らしさ」があり、社会の変化の中で「その人らしさ」をシステムとして支援することが必要になる。障害のある人、外国籍の人、スピリチュアルなケアが必要な人、など多様なニーズがある。ただ一律に支援したりするのではなく、一人ひとりの「理解」に基づいた「支援」がセットでなければならない。そういう考え方を「ヒューマンサービス」としてコアカリキュラムに持つ大学にしたい。

そのため県立保健福祉大学では、基礎教育を行うと同時に、コアカリキュラムとして「人とは何か」という理解を図り、保健・医療・福祉を連携、協働、総合化でき

る人材を養成するカリキュラムを基礎とすることを、2年間議論を重ねて決めていきました。

学生たちは看護学科、社会福祉学科、リハビリテーション学科、それぞれの専門を身につけると同時に、人間総合専門基礎という、人間・健康の理解、それに必要な人権意識、コミュニケーションの方法を学ぶことが必修です。さらに連携実践科目において、異なる学科の学生が混ざって現場に出ることを、1年生から行います。国家資格、独自プログラム、実習も1年からと、学生さんはかなりタイトです。でも不思議に、学生たちは学校が好きになって、朝から晩まで学校に居るんですよ。「もっと遊んだほうが良い」と言っていますけど。

※1 湘南国際村フォーラム

「持続可能な社会」をテーマに、湘南国際村の関係機関をはじめ、多分野の研究者が集い討議を行うフォーラム。詳しくは8ページ「KIFレポート」を参照。

※2 阿部志郎

1926年東京生まれ。東京商科大学（現一橋大学）卒業。米国ユニオン神学大学院留学。明治学院大学助教授等を経て、神奈川県立保健福祉大学学長（2003～2007年）。横須賀基督教社会館の活動を市民レベルで実践してきた、日本における地域福祉のパイオニア。

1問1答

■座右の銘

「つなぎ、つながり、つなぎあう」

大学のミッションでもあります。人は自分を生かすにも、自分だけでは何もできません。今、母親が孤立感から幼児虐待にはいたり、老人が孤独死しています。「ともに生きる」社会を作っていけないと、人が孤立したり、排除されたり、格差の中に沈んでいったりすると思います。

■仕事以外の楽しみ

旅（出張）に出たとき、できるだけその土地のもの、文化・暮らし・町並みに親しむこと。先日は、近江八幡で仕事が終わった後、真っ暗な中、タクシーで昔の町並みが残る場所を見に行きました。

■好きな色

水色。先日セーターを買ったとき、この色がお好きですかとお店の人に聞かれて「そうかな」と思いました。

Interview Notes

穏やかな語り口でひとの気持ちを惹きつける、名コーディネーターとしても名高い先生ですが、その背景には公私ともに厳しい時代を生き抜かれた裏付けがあることを知りました。一つ一つのご経験を消化し、専門を通して社会に還元していく強さに感銘を受けました。

〔2008年10月20日 県立保健福祉大にてインタビュー／栗田和佳子、清水紀人〕

●プロフィール

神奈川県立保健福祉大学学長。

立教大学大学院文学研究科応用社会学専攻修了後、英国マンチェスター大学院留学。明治学院大学副学長、神奈川県立保健福祉大学保健福祉学部長などを経て現職。福祉政策のみならず、1986年に東京ボランティアセンター（現、東京ボランティア・市民活動センター）所長に就任するなど、ボランティア活動を精力的に推進。著書に、『社会福祉援助活動のパラダイム—転換期の実践』『社会福祉援助活動における方法と主体』（ともに相川書房）『障害のある人へのボランティア活動』（監修、偕成社）など。



■ 地球市民ひろば（フォーラム）

開催日 11月15日、22日、24日、29日

場 所 あ-1 352

近代化やグローバル化の進展による画一化が進む一方で、マジョリティ、マイノリティの「違い」や「格差」が顕著になっている今日、生存や文化的アイデンティティを最も脅かされている人たちにスポットをあてて、共に生きるために必要なまなざしを一緒に考えました。



バングラデシュ・ジューマ民族のゲストを招いての報告会

具体的には、バングラデシュの先住民族による現地報告、アイヌ民族の方のライフヒストリーや活動の様子を聞くセミナー、アイヌ民族の楽器作りなどを実施しました。また、宣言60周年を迎えた「世界人権宣言」を、先住民族という切り口で改めて読み返すセミナーも行いました。国家や集団内での力学や多様性を改めて認識する必要性、歴史的背景を押さえていく大切さを考えさせられる内容でした。

■ リーダーシップ養成講座

開催日 10月25日～26日

場 所 湘南国際村センター

コミュニケーション・スキルと社会を読み解くためのナレッジ、これに基づくリーダーシップについて、1泊2日のセミナーを通して、若手社会人と学生が講師陣とともに熱い議論を繰り広げま



講師を中心に、参加者が議論をする様子

した。今回は、マキャヴェッリの君主論を読み解き、参加者が議論・対話を繰り広げるとともに、オバマ次期大統領の演説から、どのように人の心に訴えかけ、有効なコミュニケーションを考えることができるか、について学びました。

穴埋めや〇×式の教育ではなく、古きに学び、普遍的な価値について自ら思考し、議論することを可能にする、次世代に求められる人材育成の一つのかたちとして、研究・実践を重ねていきたい講座です。

■ 第6回インカレ国際セミナー

開催日 11月28日～30日

場 所 湘南国際村センター

第6回となる湘南国際村インカレ国際セミナーは、「東アジア共通の家」という毎年の大テーマに基づき、「よりよき環境と安全を求めて」と題し、3日間、86名の参加者が、熱い議論を戦わせました。基調講演では浜中裕徳（財）地球環境戦略研究機関理事長に東アジアの環境政策と協力についてお話しいただき、参加者はこれを基に7つの分科会に分かれ、毎晩遅くまで議論を重ね、最終日には国際会議場で発表を行いました。

今年は、初めての試みとして館内に図書とPCを備えた部屋を開設しましたが、非常に熱心に勉強する学生達で活気づき、いつもながらに学生の意欲と熱意に満ち満ちた2泊3日でした。



国際会議場にて、参加者全員の集合写真

■ 湘南国際村フォーラム

開催日 12月9日～10日

場 所 湘南国際村センター

湘南国際村に関連する知的機関の協力を得ながら、学問分野を超えた研究者の対話を通して、「持続可能な社会」像について新たな知見を切り開くためのフォーラムです。今回は、私たちにとっての幸福とは何か、また幸福をはかるために、現代社会に必要とされる価値はどのようなものになるのか、という問題意識のもとに「科学」の営み・「こころ」の営みをテーマにして、多様な分野の研究者による3つの講演と討議が行われました。細分化している科学の知見をいかに総合化していくのか、宗教によって育まれてきた生命観をどのように活かしていけるのか、などについて活発に討議され、参加者からもさまざまな意見や質問が寄せられました。



Event Schedule

これから開催される催し
イベント スケジュール

湘南国際村アカデミア

開催日時 1月31日(土) 14:00～16:00
場 所 地球環境戦略研究機関 (第一会議室)

内 容: 植樹により地域本来の素肌・素顔の森を蘇らせ、21世紀における日本人の命の基盤の再生を願う生態学の第一人者、地球環境戦略研究機関国際生態学センター長の宮脇昭さんに、「ふるさとの木によるふるさとの森づくり～湘南国際村から世界へ」をテーマに講演(90分)をいただき、その後、来場者と質疑応答(30分)を行います。地球環境戦略研究機関では今年5月に設立10周年記念として、3000本の植樹を実施しました。会場ではその木々の成長も御覧いただけます。

対 象: 一般 定 員: 100名 参 加 費: 無料
申込方法: 「事業名」「氏名」「住所」「電話番号」「FAX番号」「メールアドレス」を明記し、はがき、FAX、メールで下記まで。(締切り1月20日火曜日、応募者多数の場合は抽選)

問 合 せ: 湘南国際村学術研究センター (担当: はらしま)
申 込 先 TEL: 046-855-1822 (土日休み)
FAX: 046-858-1210
E-mail: harashima@kif.ac

地域の国際化を考えるセミナー2009 身近にできる国際交流ボランティア ～“人”との関わりがここにある。～

開催日時 2月7日(土) 13:30～16:30
場 所 あ-あ 355 1階 ワークショップルーム

内 容: 講演とパネルトーク

1. 講演「地域における国際化の現状とその課題について」
杉澤経子さんを招き地域の国際化の現状と外国籍住民の社会背景などをわかりやすく説明していただきます。
講師: 杉澤経子さん(東京外国語大学 多言語・多文化教育研究センター プログラムコーディネーター)
2. パネルトーク ～当事者・実践者の声～
参加ゲスト: 小野里純子さん(NPO 法人国際交流ハーティ港南台)、崔英善さん(さがみはら国際交流ラウンジ)、比嘉リカルド光雄さん(TIE トマトマの会)
コーディネーター: 杉澤経子さん

対 象: 一般 定 員: 40名(先着順) 参 加 費: 無料
申込方法: 「氏名」「年齢」「電話番号」を下記まで。
問 合 せ: 情報サービス課(担当: やまむら)
申 込 先 TEL: 045-896-2896(祝日除く月曜休み)
E-mail: kikaku@k-i-a.or.jp

多文化子ども支援ネットワークフォーラム 外国につながる子どもの支援を考える ～中国・フィリピン出身の子どもたちの今～

開催日時 2月11日(水・祝) 13:30～17:00
場 所 あ-あ 355 1階 大会議室

近年増加傾向が顕著な中国やフィリピン出身の10代の子どもたち。学校や支援の現場からの報告を通して彼女／彼らの背景や直面する課題、必要な支援について考えてみませんか。

内 容: 第一部 事例報告 「学校内外の支援の現場から」
王 慧 謹さん(多文化共生センター東京代表)
坪谷美欧子さん(横浜市立大学准教授)
原 千代子さん(川崎市ふれあい館職員)

第二部 ディスカッション「どんな支援が必要か」

対 象: 一般 定 員: 70名 参 加 費: 無料
申込方法: 「氏名」「所属」「電話番号」を下記まで。
問 合 せ: 国際協力課(担当: とみもと)
申 込 先 TEL: 045-896-2964(祝日除く月曜休み)
FAX: 045-896-2945
E-mail: tomimoto@k-i-a.or.jp

アートに触れてココロを磨く ～三浦半島スタディツアー～アート編～

開催日時 2月21日(土)、22日(日)(1泊2日)
集 合 10:30、解散 15:00
場 所 湘南国際村センター、神奈川県立近代美術館葉山館、横須賀美術館

内 容: 湘南国際村を拠点に、近代美術館葉山と横須賀美術館を巡り、ギャラリートークとワークショップであなたの芸術感性を花開かせる1泊2日。
講師: 林容子さん(尚美学園大学准教授・アートマネジメント)、及川卓也さん(元anan編集長・女子美術大学講師クロスメディアアート)

対 象: アートに関心のある一般の方
定 員: 40名(最小催行人数10名)
参 加 費: 25,000円(予定)
申込方法: 「事業名」「住所」「氏名」「電話番号」「メールアドレス」を明記しFAXまたはメールで下記まで。
(締切2月13日金曜日)
問 合 せ: 湘南国際村学術研究センター(担当: しみず)
申 込 先 TEL: 046-855-1821(土日祝休み)
FAX: 046-858-1210
E-mail: shimizu@kif.ac

Mail Magazine

メールマガジン

かながわ国際交流財団が行うすべての催しの情報を入手したい方は、メールマガジンの読者登録をお勧めします。
登録はこちらの URL にアクセス▶ <http://www.k-i-a.or.jp/mail-maga>

KIF
special
Report

国連関連国際人材育成セミナー報告

テーマ：「戦争は避けられないのか？～イラク戦争に学ぶ～」

協力：模擬国連委員会、川崎市平和館 後援：(財)日本国際連合協会

本セミナーは、神奈川県内の高校生・大学1・2年生を対象に、国連および地球規模の課題に対する理解と関心を促し、将来にわたって活躍する国際的な人材を育成することを目的として、2007年度から実施している事業です。大学生が運営する模擬国連委員会の協力のもと、県内公立私立高校の生徒や大学生27名が集まり活発な議論が行われました。このセミナーの特徴は、「模擬国連」の形式を取り入れていることです。模擬国連では、参加者が各国の国連大使の役割を演じながら、過去に実際に行われた国際会議を再現します。各国大使の立場から国際問題を理解し、国際協調のもとで課題解決を模索することが求められます。今年はイラク戦争の開戦直前にあたる2003年3月7日の安全保障理事会会を再現しました。

プログラム

【開催日】2008年10月26日、11月2日、3日

第1日：事前学習→オリエンテーション、背景説明&国連の映像資料、ディスカッション「『平和』って何だろう」、希望国の選択

第2日：模擬国連会議

第3日：レビュー→会議の振り返り、中東調査会・大野元裕さんの講演、まとめと発表



▲セミナー終了後の記念撮影

■参加者の声

◇今回のセミナーに参加して、私が思い描いていた世界の平和という理想の実現は、どんなに難しいことであるか学びました。現実を知ることは大切なことだと思うので、本当に良かったです。しかし私は理想を捨てません。諦めません。私たちが困難な世界の現状について考え、それを変えていくことが大切だと思っています。様々なことを

知り、気付かされ、学ぶことの多いセミナーに参加することができて良かったです。

(県立高3年／感想から一部抜粋)

◇知らないことだらけのことを先生や専門家の人に聞くといった「受け身の戦争」ではなく、その深い部分や中身について同年代の人と話し合いをしたのは初めての経験でした。

(県立高2年／感想から一部抜粋)

◇模擬国連セミナーに参加したことで多くを学

び、まだ知識不足ではありますが、戦争のオルタナティブについて自分なりに具体的に考えられるようになりました。その意味で、今回セミナーに参加したことは非常に有意義な経験になったと思います。世界にはイラク戦争の他にも問題が山積しています。模擬国連というツールを通して、世界情勢についてもっと学び、将来何らかの形で世界平和に貢献したいです。

(県立高2年／感想から一部抜粋)

報告書の紹介

国連関連国際人材育成
セミナー報告書

上記セミナーの「報告書」を作成しました。報告書には、事前学習会の内容や模擬国連会議で提出された決議案や修正案、大野講師による講演や参加者の感想が掲載されています。また、セミナー終了後に米大統領選が行われたことから、セミナー終了後のイラクと世界の動きにも触れています。入手方法については、下記までお問合せください。



(A4、2009年3月末発行予定)

■問合せ：国際協力課 (担当：ふくしま)

TEL：045-896-2964

国連大学グローバル・セミナー
第24回湘南セッション報告書
「地球的連帯を求めて～正義・平和・平等」

2008年9月1日～5日に湘南国際村で行われた4泊5日のセミナーを凝縮した報告書。留学生を含む参加学生が、講義内容や各グループの討論を日英2ヶ国語でレポートしています。表紙は、2008年ザンビアの首都ルサカにて参加学生が撮影したもの。市場にいる親子の「平和」な一時から、地球的な「平等」や「正義」、そして「平和」について考えさせられます。



表紙 (A4、140頁、2009年3月末発行予定)

■問合せ：湘南国際村学術研究センター (担当：なかにし)

TEL：046-855-1821

かながわの キーパーソン

かながわで様々な
分野において活躍している
人を紹介します。



「日本型の教育からはみ出た教育者」、
自らをこう評する。

三浦市の小学校長を務めた後、大学で教員を目指す学生を指導する傍ら、書籍の執筆、講演活動、勉強会の主宰等を行う。活躍の場は多岐に亘るが、「おもしろい授業を考える」というテーマだけは現役時代から変わらない。

今より比較的自由だったという小学校教員時代、授業中に子ども達が暗い目をするのが嫌で、子ども達を惹きつけるアイデア

千葉 保さん（『コンビニ弁当16万キロの旅』監修など） 「子どもたちに生きるヒントを」

を考えては実践した。わりばしを題材に熱帯雨林の減少を考える授業やハンバーガーを基に食生活の変化を考える授業では、身近なテーマとグループで力を合わせて問題を考える千葉さんの仕掛けに子ども達は夢中になった。

教員になった当初は戸惑いもあった。命令をすれば言うことを聞くものだと思っていた子ども達は、いくら叱っても言うことを聞いてくれない。反対に、体調を崩し声が出なくなった時には、親身に心配してくれた。「子ども達とは本音で向き合わなければいけない」、子ども達の声に耳を傾け、退屈な授業をおもしろくする方法ばかり考えた。

校長になる契機が訪れた時も、現場にこだわる気持ちが強かった。しかし、同じ志を持つ仲間の強い勧めもあって、子ども達が楽しいと思う学校作りのために校長を務めることを決意した。校長になってからは、教員同士のつながりを大切にした。教

員同士がアイデアを出し合い、お互いに自信をつけられる環境を整えることに力を注いだ。

現在教鞭を執る國學院大学のゼミでは、若い学生達が、様々な授業案を発表する。女性参政権の問題について、その当時反対意見を言った議員を演じる事で、選挙に関心を持たせようとする授業のアイデアには感心した。

教育を再生させるのはペーパーテストではなく、子どもを惹きつける授業だと言う。「授業は生きるヒントにならなければいけない」

※『コンビニ弁当16万キロの旅』

「コンビニ弁当」から日本の食料事情を明らかにし、分かりやすいイラストとクイズで、世界の食糧問題や環境問題を考えさせてくれる。他にも『授業・日本は、どこへ行く？』『学校にさわやかな風が吹く』など「授業」がキーワードの著作がある。

MIXED RECOMMEND

K I F スタッフから
本・映画・音楽などの
おすすめを紹介します。



『旅行者の朝食』

著 者：米原 万里
出版社：文藝春秋
出版年：2004 年（文庫版）



ロシア語通訳者として第一線で活躍した著者による、全編食べ物についてのエッセイ。読みながらここまで想像力と食欲と爆笑を誘うのは、彼女の「食べるためにこそ生きる」という人生観から生まれ出る食への熱意が成せる技。「食」という切り口から、政治・経済、歴史にまで洞察が及ぶ好奇心には圧倒される。時折登場するガセネタに、読者は腹を抱えて笑い、そして腹を空かすのである。

『スペインの宇宙食』

著 者：菊地 成孔
出版社：小学館
出版年：2003 年



著者は「ジャズ界の奇才」と呼ばれるサックス奏者である。できれば彼の演奏を聴いてからこの本を手にとってほしい。彼曰く「不安神経症発症直前夜」に自身のサイトに書き綴った文章をエッセイとしてまとめた本著。生来のワーカホリックを自認する狂騒の日々で、食事にだけは時間をかけているとわかる。鋭敏な舌と一皿を大事にするがゆえの饒舌な語りだが、この人とはデートで食事をしたくないかも…。

『野火』

著 者：大岡 昇平
出版社：新潮社
出版年：1954 年（文庫版）



さて、あなたの周りに、緑色の薄ぼんやりとした光の輪を背負った人はいるだろうか。これは武田泰淳の小説『ひかりごけ』の中で言及される人肉を喰らった人に現れる光のことをいう。本著も「食」というより、「食のタブー」に触れた作品だ。「生きるために食べる」か？ 食べなければそれでいいのか？ 太平洋戦争激戦地、フィリピン・レイテ島で軍から追放され、行き場を失った一兵士の葛藤を描く。

KIF
special
event

21世紀かながわ円卓会議

「都市と地域の未来を拓く

～まちづくり・ものづくり・ひとづくり～」

開催日時 3月20日(金・祝)・21日(土)

場 所 湘南国際村センター・国際会議場

2008年度・2009年度で開催する「21世紀かながわ円卓会議」では、「新しい都市と地域」をトータルテーマに掲げ、グローバリゼーションの潮流に対応するための手法として都市と地域の役割に着目し、今後のあるべき姿について、さまざまな観点から検討します。08年度は理論編として討議を行い、09年度はその成果を生かしながら具体的に実践に移していく際の現状と課題について討議する予定です。



前回の様子

モデレーター：神野直彦（東京大学大学院教授）

形 式：2日にわたる複数の講演とそれに伴う円卓会議形式による討議を行います。

講演内容（一部）

「サステナブル・シティの取組み」岡部明子さん（千葉大学准教授）

「人のつながりを豊かにするアートイベント」北川フラムさん（アートディレクター）

「地域を拓く文化力」野呂昭彦さん（三重県知事）

参 加 費：2,000円

申込方法：「事業名」「住所」「氏名」「電話番号」を明記しFAX、メールで下記まで。

問 合 せ：湘南国際村学術研究センター（担当：しみず）

TEL：046-855-1821 FAX：046-858-1210 E-mail：shimizu@kif.ac

読者の皆様の投稿を募集します！

一方的に発信するだけでなく、読者の皆様からも本紙についての意見や感想をいただきたいと思っています。双方向に語り合う場として、紙面を活用していきたいと考えていますので、ぜひ皆様の「声」をお寄せください。

投稿例▶

●自分がしている国際協力・国際交流の活動について

●ボランティア活動をしていて日ごろ感じていること ●財団会員の方は、「会員になったわけ」など

投稿先 投稿者の連絡先を明記し、原稿をメール、FAX、郵送でお送りください。

FAX：045-896-2945 E-mail：minsai@k-i-a.or.jp

〒247-0007 横浜市長区小菅ヶ谷1-2-1 1F かながわ国際交流財団 ニュースレター編集係

かながわ国際交流財団ニュースレター
2009年1月1日発行 第11号

発行/財団法人かながわ国際交流財団

〒247-0007 横浜市長区小菅ヶ谷1-2-1 2F 2F 355 1F

TEL：045-896-2626（代表）FAX：045-896-2945

URL：http://www.k-i-a.or.jp

E-mail：minsai@k-i-a.or.jp

印刷：DTP/有限会社 青史堂印刷

広告を掲載しませんか？

県内で国際協力・国際交流の活動をしている市民グループをはじめ、図書館、公民館、バスポートセンター、県立高校、市町村国際担当部署、市町村教育委員会、市町村区役所、県庁、財団会員などに配布しています。発行部数は7,000部です。お気軽にお問い合わせください。

●かながわ国際交流財団（略称「KIF」）は・・・

地球のすべての人が、国境や人種、文化の違いを越えて、人間らしく暮らせる社会の実現のため、人と人のつながりを大切に国際交流・国際協力、地球市民意識の高揚と多文化共生社会の実現、国際的な人材の育成、学術・文化交流並びに世界に向けた情報発信など様々な事業を展開しています。

●KIFサポーターになりませんか？

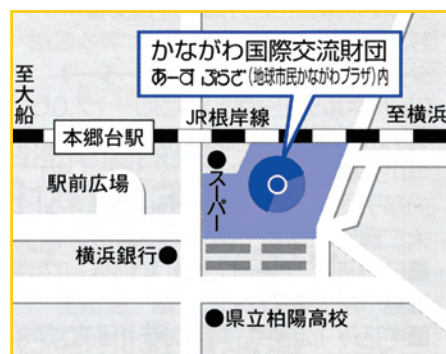
財団の活動を支援して下さるKIFサポーター（賛助会員）を募集しています。会員になると・・・

- ・財団が主催する各種催しを掲載した情報誌をお送りします。
- ・当財団の出版物の割引サービスが受けられます。
- ・会員の方を対象にした催しへ招待します。
- ・会員証の提示で、提携エスニック・レストランの優待サービスが受けられます。

※会員登録を希望する方は、財団までお問い合わせください。振込用紙など関係資料をお送りします。

★当財団は、2006年4月より、神奈川県から指定管理者の指定を受け、あーび555（地球市民かながわプラザ）を運営しています。

★このほか、神奈川県国際研修センターと神奈川県国際学生会館を運営しています。



JR根岸線「本郷台」駅改札出て左すぐ



バスで越しの場合

JR横須賀線「逗子」駅1番乗り場より、16または26系統「湘南国際村」行きバスに乗り、「湘南国際村センター前」下車。所要時間約25分 料金340円

編集後記

規模の大きいセミナーやシンポジウムを終えると、疲労感とともに充実した達成感に、気持ちがウキウキ、ソワソワします。平坦な生活の中に、儀式や祭りを取り入れてきた人の歴史を思うと、自分の高揚感も人の営みの自然な動きなんだな、と思わされます。（くり）